

館・所名	大阪歴史博物館	
<p>【シート1】 各館・所の運営状況（総括）</p>	<p style="text-align: center;">委員コメント総括</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国的に見て歴史系博物館の入館者が下落傾向にある中、展示や教育普及事業等により博物館事業参加者が増加し、自己収入が増えていることを高く評価する。今後もこの傾向を継続できるように努力してほしい。 ・館の使命に、具体的な内容がわかりにくい、抽象的な記述(充実した活動をおこなう)が見られる。使命は館運営の基本となるものであり、館内で議論を尽くして館内外の人が十分理解できる、より具体的なものに改めることを要望する。また、指定管理期間の重点目標のうち、2.の「繰り返し訪れたいくなる」の部分については、十分達成できたのか疑問である。市民に繰り返し訪問してもらうためには、市民が博物館に求めるものに更に敏感になり、市民にとって身近な博物館、市民と博物館、市民同士の交流としての機能を一層高めていくことを期待する。 ・大阪歴史博物館のスタッフの年齢構成を見ると40代が5割を超えている。スタッフの年齢構成には大きな偏りが生じている。30代以下の若い世代が館運営の中心になる時期までに、組織の経験と知識、技術、人脈等を次世代にどう伝えていくのか、中長期的視点に立って検討することが必要である。 	
<p>【シート2】 各館・所の特徴</p>	<p>「館の強み」の認識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪のシンボリックな存在である大阪城や大阪府庁、NHK大阪放送局に隣接する場所に立地し、交通至便な場所にある。また、展示内容にも深くかかわる難波宮のサイトミュージアムである。多くのコレクションを有し、大阪市博物館協会内では最多の学芸スタッフと多くのボランティアを擁し、公立の歴史系博物館の中では経営資源に恵まれた博物館である。また、開館後、10年余りということもあり、施設は新しく、外国人向けのサービスも歴史系博物館の中では行き届いている。 ・常設展示については、かなりの度合いで作り込まれており、大幅な展示替が難しく、豊富なコレクションを活用しにくい面がある。このため、展示が固定化している印象がある。また、多様なコレクションを有してはいるが、誰もが知っている目玉的な作品は決して多くはない。目玉作品に依存しないで、多様なコレクションを駆使した企画力で展示を充実していくことを期待する。 ・博物館のボランティア従事者はかなりの数になり、熱心な活動を行っていることに敬意を表したい。今後、ボランティアの活動範囲が、展示解説や外国人への支援等へ広がり、博物館の交流機能、学習機能が更に強化されることを期待する。 ・歴史と伝統を有する大阪、創造都市を標榜する大阪の基幹的な博物館として、館の強みを生かして、大阪の歴史をより意志的に語っていくことを期待する。 ・近年、大阪の文化資源を発掘する展示や教育普及事業が充実してきたことを、博物館の新たな動きとして評価する。
	<p>「館の弱み」の認識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・公立の歴史系博物館として学術的な成果を基礎に研究成果の公開を重視する運営が行われてきたことから、利用促進のためのマネジメントが不足している点は否めない。館の使命を再確認し、マネジメント体制を強化することが急務である。まじめで堅い印象が敷居を高くしている面もあるが、まじめさと堅さが高い信頼感につながるように、館の組織文化を見直していくことも重要である。利用者の視点に立った博物館運営を行うことを期待する。 ・10年前には最先端であった各種機器の老朽化が進み、収蔵スペースや展示ケースが不足してきていることは、多くの館に共通する悩みである。まずは、館として可能なことに取り組んでほしい。予算面で施設設置者(大阪市)に要望する事項については、ねばり強く、説得力のある交渉をしてほしい。各種機器の更新は、真に必要なものに厳選し、時期を失することなく対応していくことが重要である。館のスタッフ・ボランティアの力で、利用者とのコミュニケーションを強化していくことも検討してほしい。また、柔軟な利用が可能な携帯型の情報端末を活用する方法も考えられる。利用者にとっての使い勝手の良さ、更新費用の確保の見通し等を十分踏まえて、今後の在り方をタイミングよく検討することを期待する。

<p>「環境の変化」の認識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・最近の目まぐるしい環境変化は、児童生徒の減少を除き、歴史博物館にとっては、存在感を高める好機とも言える。これまでの歴史感が問い直される時代には、歴史離れと新たな歴史観の希求という相異なるものが併存することから、歴史系博物館には新たな対応が求められていると言えよう。多数の観客を受け入れる展示事業や講演会に加え、市民との交流を促進する事業に力を入れ、大阪の歴史・文化に対する関心を高め、多様な人々を包摂する、大都市の中の居場所としての機能を発揮することを期待する。
<p>指定管理期間の成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪市博物館協会が指定管理者になることで、博物館協会内の多様な個性を持つ博物館・研究所の交流、連携が進んできたことを大いに評価する。また、大学等の連携も進展し、展示や講座に反映されていることを評価する。 ・特別(企画)展「水都大阪と淀川」(22年度)「日欧のサムライたち」「大阪を襲った地震と津波」(24年度)等の連携展示はいずれも時宜を得た力のこもった好企画であった。今後の更なる展開に期待する。特別展で集積された成果を常設展示等へ活用することも検討してほしい。 ・外部資金を積極的に活用し、単独の博物館では企画と実施が難しいプロジェクトを数多く実施していることを評価する。
<p>今後の課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多額の予算を必要とする事業は、博物館の運営者では対応が難しい。現状の問題点を十分整理し、施設設置者(大阪市)と館の在り方・今後の事業展開の方向性を十分練ってほしい。 ・子どもや高齢者、団体客、アジア諸国からの来訪者等多様な人々に敷居を低くし、愛される博物館になって行くためには、大阪らしく“まいどおおきに”の精神で受入体制を整えていくことを要望する。 ・難波宮を始めとする考古関係の展示に比べ、歴史資料を使用した展示がやや手薄のように感じられる。スタッフの配置も考古に比重が置かれている。博物館の要である常設展示が、利用者の大阪の歴史・文化への理解を深め、大阪の将来を展望することに資するものになるよう歴史や民俗関係の展示の充実にも力を入れてほしい。 ・大阪歴史博物館の展示を通じて大阪の歴史と文化を総合的に理解してもらうことの重要性を考えれば、従来大阪城天守閣が主に担当してきた範囲についても、大阪歴史博物館で取り扱うことが必要と考える。両館が協働して、大阪の歴史と文化に関する情報を戦略的に発信していくことを大いに期待する。